



妻の菊子さんと洋ランの手入れ（1990年）

平成9年 日本キャンプ協会キャンプインストラクター

表彰・受賞・その他

- 昭和60年5月 昭和天皇に阿蘇の動物についてご説明
- 平成6年5月 日本鳥類保護連盟会長・鯨岡兵輔氏より「野生動物の保護」で褒状
- 11年6月 環境庁長官・真鍋賢二氏より「地域環境保全の功績」で大臣表彰
- 17年10月 (財)信友社より「信友社賞」受賞
- 11月 熊本市より「熊本市有功者」表彰

熊本博物館

「熊本博物館の西岡鐵夫さん・西岡鐵夫さんの熊本博物館」

富田 紘一

熊本市立熊本博物館は昭和27年2月に誕生した。地方の博物館としては古い設立といえる。その淵源を辿れば昭和2年、熊本城趾保存会が宇土櫓を解体修理して博物館施設としたことに由来する。開館にあたり旧第六師団司令部を第一館・宇土櫓を第二館としていた。

西岡鐵夫さんは開館の年に熊本大学理学部を卒業され信愛女学院高校に奉職されるかたわら、新生博物館の自然科学部門の資料整理にも関与され、28年から博物館職員となられた生粋である。これより博物館の組織と学芸活動を牽引されることとなる。

当時の博物館は熊本城顕彰会から宇土櫓の展示を引き

継ぎ、第一館は山崎正董氏の貝と瓦のコレクション及び松本唯一氏の岩石資料が主要なものであった。そこで西岡さんは個人・機関を問わず各所に資料の提供を依頼され展示の充実を図られた。熊本大学から寄託（現在は移管）された動物剥製標本などはこの時のものである。

昭和34年、熊本城天守閣再建のため第一館が解体になり、資料と職員は城内の櫓に移転する。35年には天守閣が分館となり、翌年には本館も花畑町の勸業館の2階と3階に再開館した。この博物館は町中の一等地ではあったが施設も悪く、入口もバス停裏の分り難いところで、入館者も年間千人そこそこという有様であった。



「夏季学校」記念写真, 前列左から5番目 1971・2年頃

そこで西岡さんは館を核にしながらも活動の場をフィールドに広げ、各種の館外活動を展開された。それは昆虫・植物・岩石・化石などの採集会、史跡・天然記念物の見学会、学校教育と連携した指導者講習会など多彩であった。その中でも西岡さんの個性を生かした催しが「星を見る会」と「夏季学校」であった。動物学が専門であったのに天文にも造詣が深かったのは、社会教育課長（生涯学習の統括）で一時博物館長も兼務された堀光之助先生から「星座にもロマンがあるよ」というアドバイスによるものだった。

勸業館での再開館以来、念願は自前の館舎での活動であった。このころは宮崎県など地方でも新しい総合博物

館が作られ始めた時期でもあった。まさにこの10年は臥薪嘗胆の時代であったが、西岡さんには新しい博物館の構想を十分に練る時間が与えられたともいえる。そしてついに47年7月に博物館建設準備会が発足、10回の審議を経て翌年には新博物館建設の答申が出された。これから副館長として職員を率い、地域に根ざして・人間生活に密着した・多くの情報を集め発信する・市民に開かれた博物館づくりに邁進される。そしてその思想とリーダーシップが結実した博物館が完成することになるのである。

それから40年近くが経過、いま博物館のリニューアルが検討されている。館内の展示は大きく変わることだろうが、この精神だけは生き続けてほしいものである。

熊本野生生物研究会 「西岡鐵夫会長を偲んで」

高添 清

本会の創設期、会長に就任いただき、20数年もの間、会の進むべき道を示され、多大な業績を残されました。動物、植物、天文、音楽、航空機など何でもござりで、本当に多くの場面で「調査研究と教育に寄与する」という本会の目的に沿う適切なご指導をいただきましたし、会員の自由な研究活動を見守っていただきました。

1991年8月、本会の3週間にも及んだアフリカ調査隊の無事の帰国を心から喜ばれ、空港でお迎えいただいたときの先生の笑顔、会員の日頃の研究活動や、研究発表を毎回楽しみし、笑顔で聞かれていたご様子は忘れられません。以前、熊本のカモシカ調査の指導をなされた北九州市立自然史・歴史博物館「いのちのたび博物館」の

小野勇一館長と、博物館についてのお話に夢中になっておられたことも、ふと思い出しました。

また、日本キャンプ協会の長年の会員でもあった会長は野外活動が大好きでした。それは森羅万象を知るといふ理念の現れでしたのでしょうか。あるとき、キャンプ場での慣例の研究発表会は夜半から雨になり、スクリーンと映写機を炊事場に機材を持ち込んで、明け方までみんなの発表を聞かれていたのを昨日のように思い出します。

2006年3月、内大臣での国の特別天然記念物ニホンカモシカ生息分布調査にも同行され、溪谷で駆け回る調査隊に目を細めていらっしゃいました。最近では、熊本県の各種の審議会の委員や座長を務められ、また、高校現



1995年1月熊野研総会で。中央が西岡会長、右は吉倉先生

場で環境問題や生物の多様性に関する内容での講演もこなされ、ご活躍中でした。

クリハラリスの対策や外来生物の問題にも大きな関心をもたれ、さらには、本会が企画中の「熊本の哺乳類」の「本」作成を楽しみにされていました。

2009年7月屋久島での皆既日食観察では、漆黒の暗闇の中で「これこそ森羅万象の真髄！」とおっしゃられていたことも昨日のように思い出されます。屋久島までの往復の船旅で、ずっと船首で前を見ておられたお姿は私たちの心に焼きついています。来年、2012年5月21日には「水俣あたりまで出かけて金環食を見よう」と楽しみにしていましたのに残念でたまりません。

西岡会長は私たちにとってはあまりにも大きな存在でした。

最後になりますが、改めて西岡会長に「有難うございました」と感謝の気持ちを添え、謹んでご冥福をお祈り申し上げたいと思います。

熊本野草の会 「西岡先生と野草の会」

福田 静子

私が野草の会に入ったのは平成9年でした。イワガサの咲く三角岳での例会のことです。

登山道に淡紫色の小さな花が咲いていました。先生は「スズメノエンドウですね。よく見て下さい、花柄があるでしょう。花柄がないのはカラスノエンドウで、その

◎会のプロフィール

1985年から2年間、熊本県教育委員会は環境庁・環境庁・文化庁の依頼を受け、特別天然記念物ニホンカモシカの熊本県内での生息分布調査を行った。

そのときの調査員を中心に、「野生動物の調査研究を行うとともに、これらを通じて自然に親しみ自然教育の発展に寄与することを目的とする」として1985年12月7日に熊本野生動物研究会として発足した。(1995年に「熊本野生生物研究会」と名称変更)

機関紙として「サインポスト」、会誌として「熊本野生生物研究会誌」(現在7号を準備中)を発行しているほか、親睦キャンプ、談話会、日常の会員の研究発表会を毎年開催する。熊本県レッドデータブックの補完調査、クリハラリスなどの特定外来生物問題にも取り組んでいる。現在会員数は82名。

中間がカスマグサです」と教えていただきました。花柄という言葉さえ知らなかった私は、野草が大好きで花を見に行きたいという思いだけで入会したのです。「花柄のあるなし」のお言葉で、私はあらゆるものをよく見るように目を開くことができましたと思います。それからはい



高森・花咲き盛野草園での例会